農工大の樹木　その35

〈解　説〉

シュロ

シュロ（ヤシ科シュロ属の種、学名：*Trachycarpus fortunei*　H.Wendl.）

この種は南九州が原産の地と言われていますが、今では関東以北にまで野生化しています。耐陰性と耐寒性が強いことがそれを可能にしているのでしょう。直立した幹の先端部に枝のように見えるのが葉で、密生します。長い葉柄の基部は密な網状の繊維に包まれ、葉身部分は扇状円形で深裂します。この種には雌株と雄株があります。雌株では晩秋に多くの実が熟し、ヒヨドリなどが好んで食べます。食べてみると薄い皮の部分は淡い甘みがあるものの渋みがあり、種子は硬くて食べられそうにありません。栄養効率の悪そうなこの種子のどこが旨いのかと思いますが、鳥にとってはご馳走なのでしょう。鳥の腸を通った種子は消化されることなく糞として排出され、各所に散布されます。このため鳥が多く集まる住宅地域内の林の中には実生や稚樹が多く見られます。その代表的な場所は国立科学博物館附属自然教育園で、そこではアオキとともにこの種の異常な生育が見られます。

葉柄のつけ根の粗い網状の繊維は摩擦に弱く、短いので紡績には向かないのですが、腐朽と伸縮に耐える力が強いことから、ひも、縄、漁網、敷物、刷毛の原料、さらにはシュロ箒として利用されてきました。この原料は鬼シュロ（雄株）から採取したようで、和歌山県が日本産原料の半分以上を産したそうです。

シュロとよく似た種にトウジュロがあります。両方とも庭園に植えられますが、両種の違いはシュロは葉が大型、葉柄が長いこと、葉の先が折れること、葉の質がやや薄い紙質であることで容易に区別できます。

（農学部教授　福　嶋　　司）